2013.3.1
106

会報

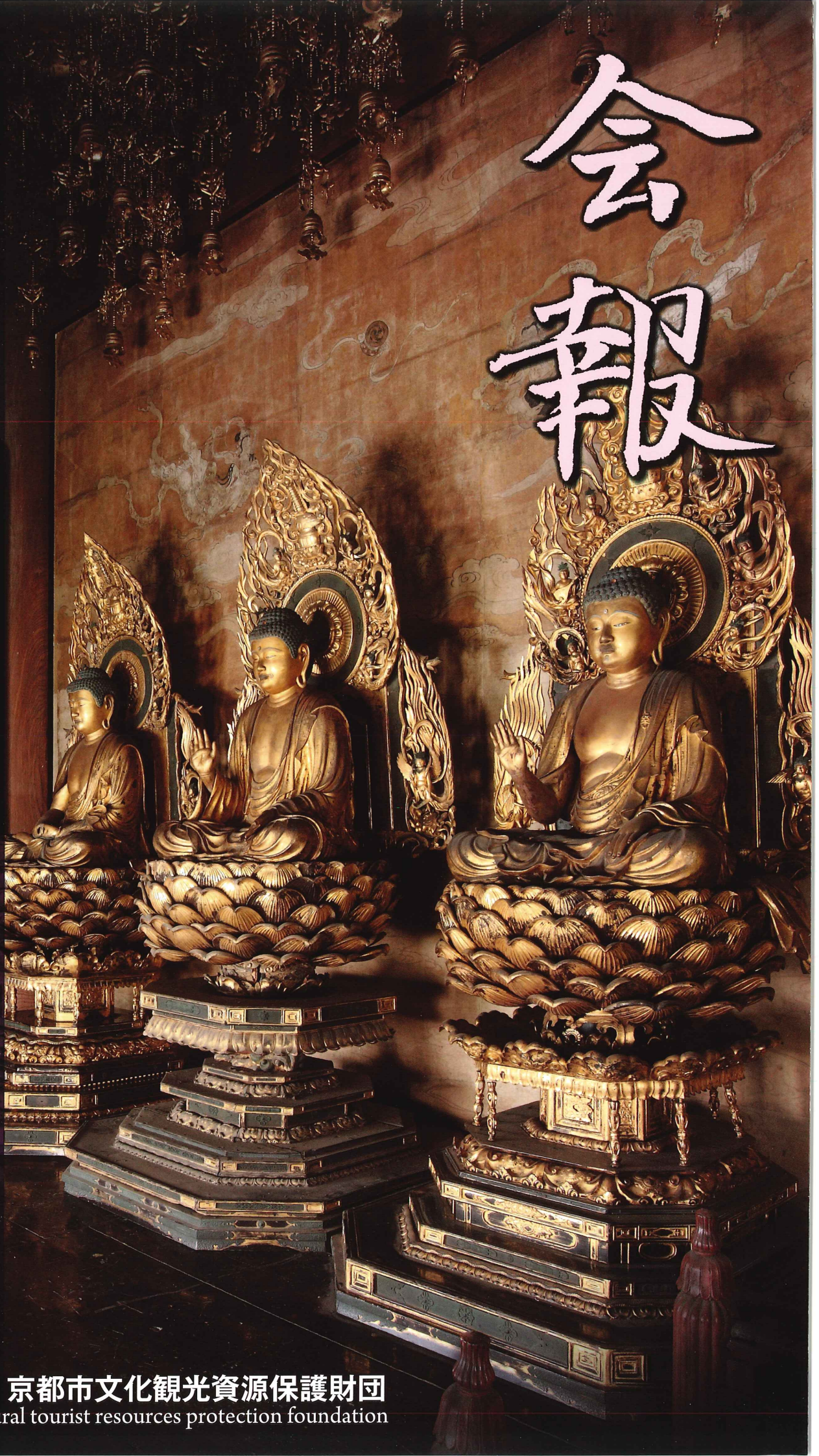
もくじ

◇2 寄稿 「障壁画の維持管理と修復」
相国寺 長得院住職 緒方 香州

◇4 特集 京の近代仏堂 その4
「近代社寺建築を支えた大工道具」
京都市文化市民局文化芸術都市推進室 文化財保護課 清水 一徳

◇8 表紙写真解説 守り伝えよう京都の文化財
助成文化財の紹介―
「泉涌寺 釈迦・阿弥陀・弥勒三世仏」

◇9 保護財団の活動



公益財団法人 京都市文化観光資源保護財団
Kyoto cultural tourist resources protection foundation

寄稿

障壁画の維持管理と修復

緒方　香州

長得院　境内

長得院は京都御所の北側に位置する臨済宗相国寺の塔頭であり、応永中期に設立された。開祖は五山文学で有名な絶海中津の弟子で鄂隠慧奫（仏慧正続国師1357～1425）であり、足利五代将軍義量の塔頭となった。寺基は以後600年間移動していないが、幾度も火災に遇い現在の建物は天明の大火後の天保年間に建てられたものを主体とし、方丈も同様であり、襖絵もこの時期に整備されたものである。

方丈には、江戸後期に一派を成した岸駒の婿養子で平安四名家の一人として知られ、山水花鳥画を得意とした岸徳（号連山1804～1859）の筆による絵画が52面描かれている。筆者の岸徳は、岸駒の後岸派の代表格として京都を中心に活躍し、安政度御所造営（1855頃完成）の障壁画制作に参加し現在も京都御所内にその襖絵を見ることができる。他に弘化３年（1846）岸岱とともに制作した兵庫豊岡の隆国寺の障壁画もあり、当時の高い評価の中で障壁画という大事業を次々手がけた様子がうかがえる。なかでも本襖絵は岸徳の単独制作であり、その代表作といっても過言ではない。ここでは岸派の筆法を受け継ぎながら、より柔和で装

方丈 襖絵

飾的な要素を強めたその画風がよく表れている。これまで研究者にもその存在は知られなかったが、本作品は彼の画業を知る上で、また幕末の京都画壇の動向をうかがう上で欠かせない資料と目される。

江戸時代に円山応挙の指導や影響のもとで江戸後期の画壇を支えた重要な画家に呉春・岸駒・原在中がいるが、応挙の没後それぞれ四条派・岸派・原派という当時の京画壇を支えた大きな流派を形成する。そのうち原在中の作品派は本山の相国寺に多く残るが、長得院の方丈襖絵はすべて岸徳のものであり一連の作品は岸派の重要な資料となるものであろう。

修復前後の襖絵の状況
写真上：修復前　写真下：修復後（部分）

当院は本山の塔頭寺院であった為、周囲の景観の状況が良く、門を入ってから唐門付の方丈に到るまでの景色は江戸末期のままであると思われ、周囲の景観も邪魔な近代的なものは殆ど視野に入らない誠に恵まれた状況にある。

唐門より方丈に入って最初の右手にある杉戸には雪の積もった針葉樹にとまった鳥が描かれ、最初の下間二之間には水辺で母虎と遊ぶ虎児が描かれ、下間一之間には四人の老人図があり、中央の室中の間には山水図が描かれ上間二之間には波涛に鷲が描かれており、上間一之間では趣きが変わり花鳥図が描かれている。

いずれの絵も人に圧迫感を与えず、かつ昂揚感に引きこむこともなく、方丈に上ってから移動するにつれ訪問者を落ち着かせかつ厳粛な気持ちにもさせ、最後には身近な花鳥図としてくつろがせる様にテーマが設定されていることが判る。

しかし誠に悲しいことには、現状は変褪色や本紙破損、乾燥による大きな亀裂もみられ、ことに間似合紙を使用しているため、紙が細片粉末化して剥落するなどの劣化が急速に進行し深刻な状態になっており、襖を外し日光の直接当たらない場所に移すなど種々に心を悩ませてはいたが、有効な安心できる対策などはできず、思案にくれるばかりであった。今回補助金を支給していただき修理にふみきることができたのは、関係各位の御高配のたまものとの心より感謝しております。

（相国寺 長得院 住職）

特集

京の近代仏堂 その4

近代社寺建築を支えた大工道具

清水　一徳

はじめに

前３回号（『京の近代仏堂』－その１～３－）を通じて，概ね明治から昭和戦前期までの京都の近代寺院建築に焦点を当てその特質をみてきました。このなかでは明治以降の堂宮系和風建築が近世以前の建築技術をさらに昇華させていったこと，また，およそ明治後期以降には建築様式が復古調に，あるいは新意匠の創造のため，自由な形態が積極的に演出されるようになることを主な論点として紹介しました。

これらは技術の裏付けがあって，初めて実現し得たものであります。加工精度，建築部材接合法の発達を進化させ，仕上がりも美しく建築構成は堅固にするなど，伝統的な木工技術をさらに進展させるだけではなく，西洋建築から学んだ建築技術を用い，それらの応　-3.5と変形も同時にすすめられていきました。小屋裏を西洋伝来のトラスと伝統的な桔木（はねぎ）の組み合わせによってまとめ，大スパンと自由な軒反りの実現がはかられることなどはその好例でありましょう。これらは明治維新後もわが国の和風の木造建築技術が健在でかつ柔軟性をもっていたことを示しており，こうした技術的成果が近代らしい堂宮系和風建築の創造を可能としていったとも言えます。

この近代木造建築技術の進展の貢献者として，建築用主要道具である木工具の発達は見逃せません。近代化・合理化に沿った職人の側からの対応で手道具を駆使して木造建築をつくる技術は，加工精度という点においても最高水準に達したといわれています。

『京の近代仏堂』最終回となる本号では近代大工道具の歴史についての理解，さらにはこれらの道具を通して見た近代堂宮建築文化の特色にまで思いを至らせてみます。

近世以前の大工道具の歴史（概説）

まず、近代にいたるまでの大工道具について、『ビジュアル版　日本の技術100年　第６巻』（1989年　筑摩書房）を中心にその歩みを簡単に通観してみます。

木の文化の国，とされる日本では昔から大工（木匠）が工人の中心であり，大工の手にした大工道具が道具の中の王者の位置を占めてきました。鉄の道具が普及しはじめた弥生時代中期の遺跡出土木材の

図１「六孫王神社権現社新縁起　坤」（六孫王（ろくそんのう）神社（京都市南区八条町）所蔵）
元禄15年（1702）に描かれた絵巻物で画面は社殿造営の場面である。前挽鋸（まえびきのこ）を用いた挽割製材による正確な製材，台鉋による部材表面の美しい切削など，近世の大工道具の充実した様子を伺い知ることができる。元禄14年建立の一連の社殿は京都市指定有形文化財として現存している。

加工痕跡をみると，鋸を除いてほぼ今日の大工道具の主要な種類が出そろっていることがわかります。鋸も古墳時代には出現していました。

しかしその鋸は横挽きのものだけで，建築の製材用の縦挽き鋸は15世紀に入ってから使われだしています。それまでは斧や鑿による打ち割り法で製材していました。鉋も古くから槍鉋がもっぱら使われていましたが，16世紀ころからはじめて今日のような台のついた台鉋が現われ，製材用の鋸とともに建築技術の革新期が現出します（図１）。

江戸時代に入ると職人技術の黄金時代がはじまり，これまで万能的であった大工道具も建具職・家具職などと分化した木工関係職人の用途にあわせて専門的・単能的な多くの種類に分化していきます。

近代の新型大工道具（概説）

既に木工具の基本的な機能は江戸時代において完成の域に達していましたが，明治以降も道具の開発・改良は続き，大正から昭和にかけて，大工道具はその最盛期を迎えます。昭和18年（1943）の労働科学研究所による大工道具の編成や道具の調査報告によると一人前の大工が本格的な仕事をするのに必要な数（標準編成）として179点の道具があげられています。

近代期にあらたに出現ないし変化をおこす築用主要道具として，縦挽き・横挽き両用の鋸である両刃鋸，鑿の刃裏を平らに研ぎやすく工夫した裏透，削り面がざらざらになる逆目を防ぐために鉋刃を二枚入れた合せ鉋（二枚鉋），ネジの利用により微調整を容易にした「機械鉋」，ボルト錐などがあげられます。以上の変化を通観するとき，近・現代における建築用主要道具は，「美に奉仕」する道具において，より精巧な加工を可能とする機能分化が進行した，と言われています。

以下にその具体的事例のいくつかを紹介したいと思います。

機械製材の導入と木挽の減少

原木を２人掛かりで縦に挽き割る大鋸に代わって，「前挽鋸」を用いる「木引」が出現したのは16世紀後半頃と考えられており，その後，江戸時代を経て昭和時代前期まで盛んに用いられます。操作方法は江戸時代の絵画資料や近代に撮影された古写真にも多く確認されるように，ななめに立て掛けた木材を縦に挽いている姿があります。かつて板をつくることは大工の徒弟が修業として行う超重労働でありました。

図２　前挽鋸

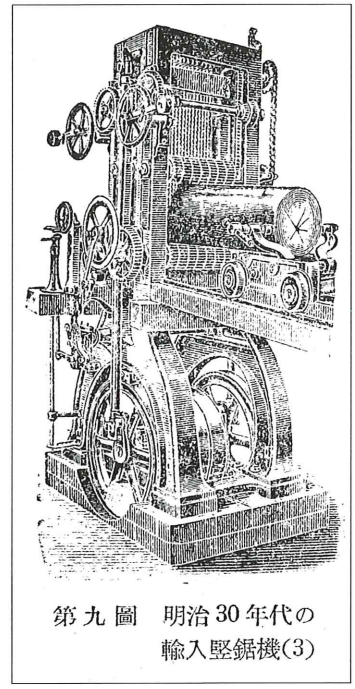


図３　1900年ごろの輸入製材機
『木材工業史話』（林材新聞社出版局　1950より）

この作業で使われたのが前挽鋸であります。その形状は時代によって変遷しますが，近代では一般的には身幅が広く，柄の取り付け角度が斜めであり，峯が大きく湾曲するものとなります（図２）。

しかし，幕末から明治初期に欧米から製材機械が導入されて木材の機械加工がはじまると，徐々に手挽きによる製材がなくなっていき，特に日露戦争以降は木工機械の飛躍的な増加が見られ，こうした機械の導入により木挽職の仕事は急速に奪われていきます（図３）。しかし，手挽きによる製材がなくなったわけではありません。さまざまな寸法の材料など，細かな要求に答えることのできる手挽きによる製材は昭和時代前期まで用いられています。

両刃鋸の出現

従来，わが国の鋸は，古墳時代の一部を除いては，

図4　片刃鋸(左)と両刃鋸(右)

すべて片側にのみ鋸歯を刻みつけた，いわゆる片刃鋸として発展してきたものであります。近代になるとこの両者が融合一体化して鋸身両側に縦挽き，横挽き双方の刃が付いて今日見るような両刃鋸として発展していきます（図4）。両刃鋸とは大工が便利に持ち歩けるよう1本で2つの機能を持たせたもので現在では替え刃式が主流です。

近年の研究によると，大型で大工が使用し得る両刃鋸の出現は明治30年代に絞ることができるとされ，その背景として特に製造過程における熱処理技術の改善など，製造技術の改善や進歩に拠るところが大きかったとされています。

機械的な鉋の出現

明治時代になって著しく機能が多様化・複合化し始める大工道具として溝形をつくる鉋である「溝鉋（みぞがんな）」が挙げられます。

用材の組み合わせやはめ込みのため，長い用材に溝形を加工する行為は室町時代には見られるといいます。近代に入ると西洋近代建築の導入とともに，溝形をつくる鉋も大きな変革を受け，機能に応じた形状の変化，

図5　基市決鉋

また目的に合わせた多様な形のものが派生していきます。罫引（けびき）刃や定規版をつけるなどして，近世以前では手加減に拠るところが大きかった溝加工が，より正確に機能化されたものになります。定規を楔（くさび）一本で移動できるように工夫された「基市決鉋（もといちじゃくり）」（図5）、あるいは日本の技術要素として長らく欠落していたネジを取りつけて，鉋の定規として台や刃の位置を調整できるようにした溝鉋も登場します。この種の溝鉋には，「機械決」，「機械鉋」などと「機械」の語を冠して呼ばれてもいます（図6）。

ネジの利用は溝鉋だけではなく，面取（めんとり）鉋でもみられ，面の角度や深さを保つため，刃幅や台木の間隙を調整するのに使われるようにもなります。

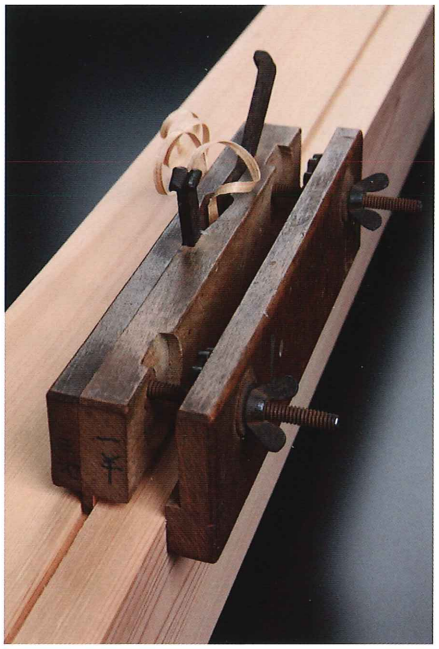


図6　機械式溝鉋

合わせ鉋（二枚鉋）の出現

現在の鉋の多くは，刃の裏にもう一枚の刃（裏金）が合わせてあります。合わせ鉋とも二枚鉋とも呼びます（図7）。これは刃の食い込みや逆目(さかめ)を防ぐかんな独特の機構であります（図8）。

わが国で二枚鉋が一般に使用されるようになったのは明治30年代からで，洋風鉋から影響を受けて考案されたものとされています。洋風鉋にくらべて構造は少し違いますが，逆目防止の原理はまったく同一です。

現在の裏金は両上端を内側に折り曲げて刃裏に接していますが，古い二枚刃鉋では，両肩にリベット状の

図７　二枚刃鉋(左)と一枚刃鉋(右)

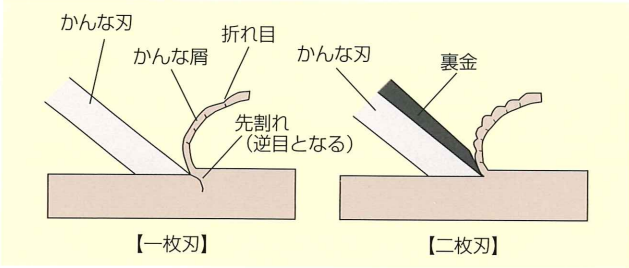


図８　鉋の構造と二枚刃の機能
二枚刃では裏金で切削面が大きくなり，かんな屑が折り曲げられ先割れが生じない。

鋲を取付け，丸い頭で刃裏に接していました。さらに古いものでは，裏金には小穴が開いていたといいます。それは当時手近にあった刻み煙草用の煙草包丁を刃裏に取り付けたのもので，煙草包丁の耳の紐通しの丸い穴がそのまま，鉋の裏刃の形式として昭和の御代まで続いたものだとされています。

ボールト錐（きり）・ハンドル錐

明治にはいって洋風建築とともに本格的なネジや歯車の原理を使用した道具や接合法が入ってきました。このためネジの形をしたボールト錐（図９）や，ハンドル錐（図10）などの西欧伝来の道具も使われるようになります。これにより太くて深い穴をあける道具が編成に加わり，和風建築にもボルトやナットによる部材接合法が広く流布することになります。

図９　ボールト錐

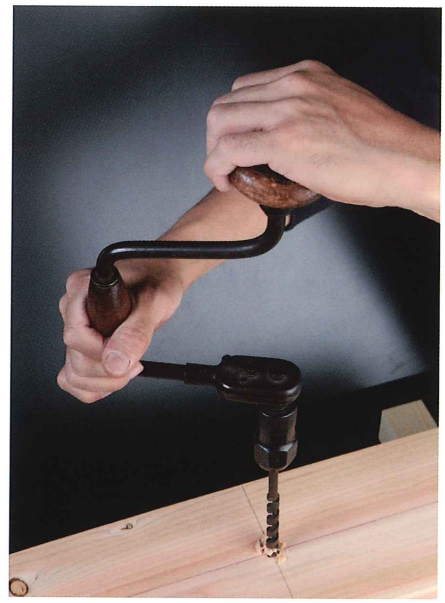


図10　ハンドル錐

名工の出自と活躍

良い仕事をするには良い道具がなければなりません。大工が万金を払っても良い道具を求めるのは当然でありましょう。それに応えて道具鍛冶も優れた道具を作ろうとします。単なる道具の域を越えた大工道具の名品も生まれ，明治から昭和にかけて，こうした名工の名も知られています。千代鶴是秀，石堂などはその代表的な人たちであります。

こうした名工の号は全国的に名を知られ，代々商標として伝えられていくようになります。

第２次大戦までに道具の産地も兵庫県の三木，新潟県の三条周辺にとほぼ固定するようになります。

本稿の作成にあたり

本稿作成にあたり，㈱奥谷組　展示資料館にて大工道具の撮影，併せて同社関係者に資料提供や大工道具に関する様々なご教示をいただきました。記して謝意を表します。

また，近現代における大工道具の変遷については，諸先学の研究成果に依拠しており，一連の報告および論文等は以下に列記するとおりとなります。さらに詳しい情報を得たい方は資料閲覧など活用をされることを願います。

≪株式会社奥谷組　展示資料館について≫（図11）

伝統的な堂宮系建築技術を広く一般に紹介する展示館。継手や仕口を中心にその模型を製作し，写真や図解に解説を添えて展示している。そのほか館内には設計図面や構造模型，建築儀式祭具や瓦，金物類のほか，今回焦点をあてた各種大工道具にまで幅広い展示内容となっている。（了）

図11　株式会社奥谷組　展示資料館
所在：京都市南区吉祥院向田東町

［参考文献一覧］

- 船曳悦子「近現代における鉋の変遷」（『日本建築学会技術報告集 第17巻 第37号』所収），2011年
- 星野欣也・植村昌子「近世・近代における前挽鉋の変遷について　小林コレクションに見られる「七郎右衛門」前挽鋸を中心に」（『竹中大工道具館研究紀要 第19号』所収），2008年
- 船曳悦子「両刃鋸の出現時期について」（『日本建築学会技術報告集 第15巻 第31号』所収），2009年
- 沖本弘「溝形をつくる鉋の形と機能」（『竹中大工道具館研究紀要　第７号』所収），1995年
- 松村貞次郎，高橋裕『ビジュアル版　日本の技術100年　第６巻　建築　土木』，筑摩書房，1989年
- 日野永一『日本の技術７　木工具の歴史』，第一法規出版，1989年

（京都市文化市民局文化芸術都市推進室　文化財保護課技師）

表紙写真解説

守り伝えよう京都の文化財－助成文化財紹介

泉涌寺　釈迦・阿弥陀・弥勒三世仏

木造像高各88.0cm
京都市東山区泉涌寺山内町

左から阿弥陀・釈迦・弥勒　三世仏

本尊釈迦如来坐像　写真左：修復前　写真右：修復後

泉涌寺は，東山三十六峯の月輪山の麓にあり，天長年間（824～34）空海が草庵を結び法輪寺を起こしたのに由来し，皇室の菩提所として知られる真言宗の大本山である。

三世仏は，寛文８年（1668）建立の仏殿（重要文化財）の須彌壇（しゅみだん）上に祀られ，泉涌寺の本尊となる釈迦如来坐像（中央・過去仏），阿弥陀如来坐像（向かって左・現在仏），弥勒如来坐像（右・未来仏）で，来世の救済を説くという三体仏で構成されている。修復前の調査により釈迦如来，阿弥陀如来は鎌倉時代の尊像と判明し，弥勒如来は寛文年間に新造されたことが判明した。

三世仏とも寛文年間（1661～73）の修理以降現在に至っていることから矧ぎ目の緩みなど損傷が著しく３カ年計画で修理が施され，当財団で助成を行いました。

表紙撮影　神崎順一

保護財団の活動

平成24年度専門委員会を開催しました。

去る11月16日㈮に平成24年度専門委員会を，７名の委員全員ご出席のもとに開催しました。小林正雄専務理事の冒頭の挨拶に続いて，武田恒夫副委員長・委員長代理が議長を務められ審議が行われました。はじめに本年３月20日に逝去されました委員長の川上貢京都大学名誉教授の後任に武田恒夫副委員長・大阪大学名誉教授が選任されました。続いて，平成24年度文化観光資源保護事業助成対象の選定では，申請がありました文化観光資源保護事業について事務局より資料，調査報告書をもとに各事業内容を説明し，審議の結果50件すべてが対象に選定されました。審議のなかで専門委員からいただいたご意見などを踏まえ，理事会において助成額を決定いたします。次に，文化観光資源の管理状況について，史跡など26カ所において本年度実施しています各整備状況などの報告を行い，承認いただきました。

文化観光資源保護助成申請事業の調査から －“八坂神社 末社 美御前社”の保存修理－

八坂神社は，9世紀中頃の創祀と伝わり古くは「祇園社」「祇園感神院」と称されました。全国にある八坂神社や素戔嗚尊（すさのおのみこと）を祭神とする神社の総本山で，祇園祭で広く知られます。今回修理されました末社の美御前社（うつくしごぜんしゃ）（写真①）は，祭神が容姿端麗であったとの伝承から美容の神として信仰されています。建物は，一間社流造本殿の身舎として，その両側面と背面三方に庇を付加した独特の形態をもち，長年の老朽化により屋根の腐食，床の腐朽，壁の剥落などが甚だしいことから保存修理工事（写真②，③）が行われました。今回の修理事前調査で建物の小屋裏から天正19年（1591）の棟札や御神像の墨書，内陣背面両脇壁の板唐戸に獅子の障壁画（写真④）が新たに発見されました。

①

②

③

④

平成24年度伝統行事・芸能功労者を表彰並びに文化観光資源保護協力者に感謝状を贈呈

長年にわたり京都の伝統行事・芸能の保存と継承に尽力された功労者並びに京都市文化観光資源保護基金に多額のご寄附をいただきました協力者の方々に対し表彰状・感謝状及び記念品を授与しています。本年度の受賞者は，次の15名の方々で，授賞式を２月27日に行います。

敬称略・順不同

◆伝統行事・芸能功労者　14名

糺の森流鏑馬神事等保存会	太田　達	（56歳）
烏相撲保存会重陽社	岡田　孝司	（61歳）
西之京瑞饋神輿保存会	倉貫　博	（64歳）
上賀茂さんやれ保存会連絡協議会	藤井　一男	（72歳）
三栖・炬火会	佐藤　照雄	（65歳）
御香宮獅々若会	髙見　尚伸	（52歳）
壬生大念佛講	竹山　晶夫	（64歳）
京都中堂寺六齋會	橋本　勝	（71歳）
壬生六斎念仏講中	渡邉　弘二	（48歳）
六斎念仏上鳥羽橋上鉦講中	川勝　義弘	（68歳）
西院六斎念仏保存会	近藤　淳史	（46歳）
八瀬郷土文化保存会	竹林　俊治	（80歳）
上賀茂紅葉音頭保存会	仁井田孝子	（82歳）
上高野念佛供養踊保存会	渡邉　浩一	（73歳）

◆文化観光資源保護協力者　１名

安田　守男

史跡「天皇の杜古墳」,「大枝山古墳群」の樹木整備を行い，景観を復元しました。

日常，維持管理を行っています史跡「天皇の杜古墳」（京都市西京区御陵塚ノ越町・写真①）において，史跡地内の樹木が繁茂し照明灯を覆うなど景観を損ねていることから傷害木などの樹木伐採を行い当史跡の環境整備につとめました。（写真②）

京都市指定の史跡「大枝山古墳群」（京都市西京区御陵大枝山町・写真③）では，古墳周辺の樹木が繁茂するなど荒廃していることから史跡景観を復元するため，高木などの樹木伐採を行いました。また，見学者の利便につとめるため，園路の石段の補修や手摺りを設置しました。（写真④・⑤）

①

②

③

④

⑤

平成25年度 文化観光資源保護事業助成申請の募集を行います。

京都市域の文化観光資源や伝統行事，芸能などを後世に継承していくことを目的に助成事業を実施しています。平成25年度の助成申請の募集を下記のとおりを行います。

■助成申請募集事業

平成25年度（平成25年４月１日～平成26年３月31日）において実施される文化観光資源所有者・管理者，伝統行事・芸能保存団体などが行う下記の事業で，当財団が定める文化観光資源保護事業助成金交付対象選定基準に該当する事業。

(1) 文化財所有者，管理者が行う文化観光資源保護事業
(2) 伝統行事，芸能の保存及び執行事業
(3) 文化観光資源をとりまく自然環境の保全及びその整備事業
(4) 文化観光資源施設の整備事業

※詳しくは，当財団のウェブサイト「2013年度 文化観光資源保護助成事業実施要領」をご覧下さい。

■助成申請事前相談

日　時　４月１日㈮～30日㈫　９時～17時
場　所　当財団事務局（事前連絡予約必要・相談者は申請者に限る）
※事業計画書など事前審査のうえで，当財団のウェブサイトから申請していただきます。

文化財特別公開事業 京の文化財探訪『建仁寺「開山堂（旧護国院）」と「浴室」』を実施します。

800年の歴史と文化を伝える京都最初の禅苑「建仁寺」の開山・栄西禅師を祀る開山堂（旧護国院）楼門の修復を記念し，普段は，一般に公開されていない開山堂（旧護国院）と禅宗七堂伽藍の一つ「浴室」の特別公開を実施します。

- **日　時**　３月16日㈯～24日㈰　10時～16時（受付　15時30分まで）
- **所在地**　建仁寺（京都市東山区大和大路通四条下る四丁目小松町）
- **拝観料**　700円（高校生以上）　※拝観料の一部は，建仁寺の文化財維持管理に助成します。
- **後　援**／京都市，**協　力**／京都の文化財を守る会

※詳しくは，当財団のウェブサイトをご覧下さい。

客殿

京都市文化観光資源保護財団パンフレットを“京都総合観光案内所「京なび」”に設置しています。

このたび，公益社団法人京都市観光協会のご協力をいただき，JR京都駅ビル２階の京都総合観光案内所「京なび」に当財団の事業活動を紹介していますパンフレットを設置していただきました。京都観光に訪れた国内外の利用者に京都の文化観光資源保護への支援と協力を呼び掛けていきます。

京都市文化観光資源保護財団ウェブサイト
－京都　その文化遺産の保護と未来のために－

http://www.kyobunka.or.jp

事業活動の案内，情報公開や京都の文化財，観光などの情報発信を行っています。また，会員専用サイトでは会員事業やお便りなど掲載していますので，ご利用下さい。

ご支援・ご協力ありがとうございました

特別寄附金・一般寄附金・基金寄附金　芳名録（2012.9.1～12.31）

（敬称略）

[特別寄附金]

[公益目的事業共通]

法　人

匿名１名

個　人

松本きのえ（京都市）　中島　康榮（京都市）　岩崎　　進（京都市）
蔭山　利雄（京都市）　矢野　精一（宇治市）　岩崎　好江（京都市）
柳　　久子（枚方市）　貴瀬　　勝（京都市）　奥村　和子（京都市）　ほか匿名２名

[文化観光資源保護事業]

法　人

㈱田中長奈良漬店　代表取締役　田中長兵衛（京都市）　宗教法人　善想寺　代表役員　青木英展（京都市）
慈済院　代表役員　小林承鐵　(京都市)

個　人

吉岡　　健（京都市）　赤間喜代子（向日市）　太田　　稔（京都市）　奥山　脩二（京都市）
松村美南子（福岡市）　藤森　弘子（宇治市）　尾嶋　遣一（刈谷市）　廣瀬　功一（京都市）
赤間　義男（向日市）　朝倉　　誠（津市）　山田　庫市（京都市）　ほか匿名５名

[一般(会員)寄附金]

法　人

霊雲院　代表役員　（京都市）　上賀茂やすらい踊保存会　会長　藤井博志（京都市）
平安雅楽会　理事長　中川平（京都市）　常寂光寺　代表役員　長尾憲佑（京都市）
壬生六斎念仏講中　会長　林啓之典（京都市）　ほか匿名１名

個　人

加藤　安惠（京都市）　伊勢　初枝（京都市）　大村　玲子（草津市）　岩崎　好江（京都市）
吉岡　　健（宇治市）　伊勢　和夫（京都市）　吉川　克枝（京都市）　秋田谷徳靖（横浜市）
寺内　浩子（京都市）　髙橋　克枝（京都市）　山田　享子（京都市）　杉田　　実（八尾市）
大倉千枝子（京都市）　篠原　　明（京都府乙訓郡）　岡本　　朗（向日市）　渡邊礼以子（京都市）
松村　稔子（京都市）　春田　善三（京都市）　花岡　　健（京都市）　渡邊　勝広（京都市）
塩﨑　健吉（京都市）　野村　小雪（宇治市）　森川　照子（京都市）　土屋　英夫（京都市）
塩﨑　節子（京都市）　岡本　克彦（浜松市）　髙橋　昭平（京都市）　冨永　文雄（京都市）
林　　節子（鎌倉市）　田上進一郎（大阪市）　林　　詠子（八幡市）　冨永　由子（京都市）
林　秀太郎（鎌倉市）　春田　光子（京都市）　中川　利夫（高槻市）　齊藤　武夫（京都市）
中根アキ子（長岡京市）　砂田　岩男（広島市）　柳田　康子（大津市）　柴田　利男（日野市）
杉本　順子（京都市）　村川とし子（芦屋市）　熊倉美智子（京都市）　本道　隆子（藤枝市）
村上千恵子（亀岡市）　東森　治世（京都市）　奥村　咲子（京都市）　宮田　千秋（京都市）
杉本　昌夫（京都市）　浅野　明美（京都市）　魚住　浩明（向日市）　宮田　喜義（京都市）
舩越　勝博（京都市）　笹池　正二（京都市）　五十棲熙江（守口市）　重道　直美（宇治市）
近藤　漱二（神戸市）　常山　勇太（大阪市）　森田　俊子（京都市）　吉岡　忠義（京都市）
伊勢　芳夫（尼崎市）　太田　錠次（愛知県額田郡）　中尾　明美（京都市）　藤野　千津（京都市）
小野　光枝（横浜市）　朝倉　育子（津市）　井上　惠子（大阪市）　大竹　ちさ（大津市）
操田　邦男（堺市）　中辻　政美（城陽市）　柳　　久子（枚方市）　小澤　一也（京都市）
原山八重子（京都市）　山本　恭子（宇治市）　神野　嘉彦（大阪府三島郡）　清水　史郎（京都市）
今野　勇一（高槻市）　前中　恵子（城陽市）　仲本　仁江（栗東市）　浅見　　惠（東京都）
渡辺三根子（枚方市）　大倉惠美子（高槻市）　磯川　政一（京都市）　糟谷　範子（京都市）
井樋　治正（下野市）　金本　佳子（宇治市）　平野　昭子（京都市）　北村　敏郎（大垣市）
髙木　陽子（京都市）　田中美恵子（長岡京市）　高橋　敏雄（京都市）　金子　明子（京都市）
船田　生人（鳥取県岩美郡）　田中　正一（長岡京市）　岩井　至栄（京都市）　松本　孝子（大津市）
拝師　暢彦（京都市）　北山　季雄（高槻市）　和田　秀男（京都市）　出野　秀彦（高槻市）
堺　　令子（八尾市）　三輪眞佐子（三木市）　今井　春美（京都市）　岩城　　博（東京都）
林　　享子（京都市）　淺見　喜弘（京都市）　白井　房枝（京都市）　境　　春子（京都市）
谷村　　弘（京都市）　森江　　清（京都市）　仲井　眞琴（京都市）　奥野　　勝（京都市）
岡嶋　久美（茨木市）　八木美奈子（茨木市）　田村　彰敏（京都市）　吉岡　明子（高槻市）
岡嶋　邦男（茨木市）　宮本　吉章（京都市）　山内さと子（京都市）　竹谷万喜雄（明石市）
野口　芳江（東京都）　太田　　稔（京都市）　長尾　聖子（京都市）
保坂　晶子（郡山市）　林　　節治（京都市）　梅原　志津（京都市）
保坂　清司（郡山市）　中井　　勇（向日市）　岩崎　　進（京都市）　ほか匿名43名

【京都市文化観光資源保護基金寄附金】

個　人

匿名２名

※各ご芳名は，寄附受納日順に掲載しています。

－京都の文化遺産を守り伝える活動の輪を更に広げるために
皆さまのご支援・ご協力をお願いいたします－

当財団の事業は，全国から京都を愛する法人，個人の篤志者の方々から寄せられる寄附金によって支えられています。多くの皆さまのご支援・ご協力が，かけがえのない京都の文化遺産や観光資源，伝統行事・芸能などを後世に伝える大きな力となります。今後事業活動の更なる拡充を図っていくために，皆さまからのご寄附や新しい会員募集の呼びかけに一層のご支援とご協力をお願いいたします。

また，会員の皆さまのお知り合いの方で入会をご希望される方がおられましたら活動紹介パンフレットをご送付しますので，事務局までご連絡下さい。

会員通信　会員事業を実施しました。

◆時代祭行列観覧事業（10月22日）

晴天に恵まれ，当日は京都御苑建礼門前に設置しました当財団の特設観覧席で大勢の皆さんにご観覧いただきました。京都の伝統工芸技術の粋を集め，時代考証を重ねた絢爛豪華な衣裳，祭具など時代絵巻の行列を堪能されました。

◆近代の和風名建築『都ホテル「佳水園」と名勝庭園』特別鑑賞（10月30日）

平日の午後の開催になりましたが，当日は114名の多くの方々に参加いただき，これまでの鑑賞事業とは，異なりホテルでの講演と見学を楽しんでいただきました。はじめに，講師の桐浴邦夫先生の「京都の近代数寄屋と世界－自然そして歴史とのかかわりから」のご講演で，数寄屋建築について理解を深めていただきました。コーヒーブレイクでご懇談いただいたあとウェスティン都ホテル京都さまのご協力により「葵殿庭園」を回遊し，和風別館の「佳水園」の建築を特別鑑賞しました。

参加された皆さんからのご感想（一部・敬称略）

●風格を感じさせる葵殿の講話とその後の庭園散策。そして佳水園の建物と庭園の鑑賞。大変重みのある有意義な一日を過ごさせていただきありがとうございました。（岩本あゆみ）●葵殿庭園は広間から眺めると立体絵画の様で楽しませてもらいました。佳水園は廻りの色々な部屋から眺めるのも違った感じで鑑賞できるのではと思います。（小澤一也）●なかなか見ることの出来ない二庭園を説明付で見られ，心から嬉しく一人でも多くの友人に参加して貰い，伝統的な京都の諸所を次世代に残すべく微力ながらつくしたいと思いました。（神野廣子）●都ホテルの葵殿から見る庭園とその後実際に歩いて感じる葵殿庭園は両方が相まって素晴らしさを鑑賞することができた。（林詠子）●お庭を巡りながら心が落ちついた気分を貰いました。地形を利用した自然をも借景として名庭師に依る庭作り，文化財となりますよね。（沼田茂子）●ずっと庭は広く平らな地面で，池や築山があったり，隅に小山があったりするものだと思っておりましたが，今回の庭はその考えが全くあてはまりませんでした。斜面につくられていて，水の流れがたくみに使われ，滝の音がここちよくにおいさえ感じられました。（匿名）●完全な洋風ホテルに地形を上手く生かした日本庭園。そして数多くの和風の粋をこらした部屋。目から鱗の感でした。素晴らしいホールでのティータイムも感謝しています。（匿名）●さすがにホテルだけあって講演会の運営がスムーズでよかったです。改めて東山界隈の庭園を鑑賞したくなりました。（匿名）●佳水園，葵殿庭園の企画ありがとうございました。落ちついた美しさに感動しました。桐浴先生の写真を用いたご講演は興味深く，見学の楽しみを倍加してくれました。（匿名）●すばらしい庭園と数寄屋建築物を鑑賞出来ました。桐浴先生の講演は分かりやすく良かったです。（匿名）●何ともなく話しあっている「数寄屋」という言葉に、長い歴史と先人の多くの人々の努力が積み重ねられた内容のあることが分かりました。（匿名）●話で聞いて居りましたが拝見するのは始めてで，思った以上に目の保養になりました。（匿名）

◆世界遺産「西本願寺」文化財特別鑑賞（12月17日）

年末での開催でしたが，131名の大勢の皆さんが参加されました。当日は，浄土真宗本願寺派本山本願寺内務室の熊谷正明部長さまから「西本願寺の歴史と文化財」について，ご講話をいただいた後，阿弥陀堂，御影堂を参拝し続いて書院，能舞台など世界遺産である文化財をご案内のもとに鑑賞していただきました。その後，今回が初めての一般公開となる旧仏飯所の内部と飛雲閣を特別に見学しました。また終了後には，西本願寺さまの特別なおはからいで皆さんにお仏飯の小豆粥がふるまわれ，喜んでいただきました。

参加された皆さんからのご感想（一部・敬称略）

●国宝重文の雄大な建造物趣ある書院，唐門，飛雲閣，能舞台又障壁画等350年～400年前の貴重な文化財を鑑賞し創建時からの歴史を感じました。（赤間義男）●さすが世界遺産「すばらしい」の一言の鑑賞会でした。度々の戦にも残ったことは御仏のご加護でしょうか。関係者の方々のご努力の賜でしょうか。また一人ゆっくりお参りさせていただきたいと思いました。（井戸礼子）●大工事完了後の境内阿弥陀堂等は殊の外美しく，紅葉の時期は過ぎていましたが心落ちつく拝観をさせて頂きました。天候にも恵まれ，飛雲閣もよく見れて良かったです。（拝師暢彦）●門信徒でありながら、本山の御影堂や阿弥陀堂を見学するのは初めてでした。大きさと荘厳さにおどろきました。ヨーロッパの大きな教会を何カ処か見学しましたが，それと比較しても少しも見劣りせず立派なものでした。（篠原明）●寒い中，丁寧に説明して案内して下さりありがとうございました。飛雲閣の今にも羽ばたきそうな軽やか美しさは何度みても感動します。（匿名）●個人ではなかなか鑑賞出来ない文化財に接することが出来ました。担当者様のご足労に心から感謝いたします。（匿名）●最初に緑板を使用されてご説明いただいた部長の講話が判りやすく非常に良かった。又ご案内いただいた若い僧も親切で今までの特別鑑賞よりも良かった。（匿名）●書院、飛雲閣、唐門はすばらしく、千年の都を実感しました。講話もおかゆもありがとうございました。（匿名）

◆後援事業　京都市観光協会主催「第47回京の冬の旅　非公開文化財特別公開」に招待

当財団で事業後援をしています公益社団法人京都市観光協会主催の「第47回京の冬の旅　非公開文化財特別公開」には，大勢の皆さまからお申込みをいただき，ご希望どおりのご招待をさせていただきました。

◆文化財特別鑑賞に参加された皆さんにオリジナル缶バッジを記念に進呈しています。

文化財特別鑑賞にご参加いただいた皆さまに参加記念として，各対象先のご協力により文化財の画像をモチーフにしたオリジナル缶バッジを作製し進呈しています。今後も毎回作製していくことにしていますので，楽しんでいただければ幸いです。

◆"京都・文化財ダイアリー"（平成25/2013年度版）オリジナル手帳を作製しました。

会員の皆さまに配布しております京都・文化財ダイアリーオリジナル手帳の平成25/2013年度（４月～翌年３月）を作製しました。カレンダーとメモに加え，別冊として今回は，「京都の名庭一覧」と庭園に関する主な用語解説を掲載しました。庭園鑑賞の折にご利用下さい。

京都市文化観光資源保護財団　会報No.106
発行日／2013年（平成25年）3月1日
会報題字／理事長　山口昌紀
編集・発行／公益財団法人　京都市文化観光資源保護財団　事務局
京都市東山区三条通大橋東一町目73番地2　京都三条大橋ビル3階　〒605-0001
TEL 075(752)0235 http://www.kyobunka.or.jp
印　刷／株式会社　図書印刷　同朋舎